

井尻B遺跡 8

- 井尻B遺跡群第12次調査の報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第645集



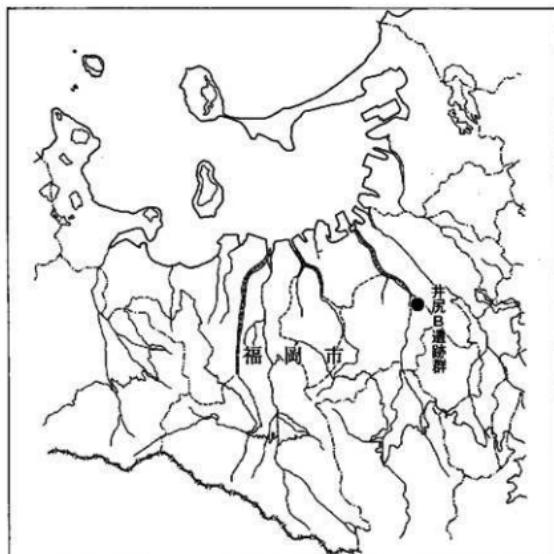
2000

福岡市教育委員会

いじり

井尻B遺跡 8

- 井尻B遺跡群第12次調査の報告 -
福岡市埋蔵文化財調査報告書第645集



調査番号 9865
調査路号 IZB-12

2000
福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたします井尻B遺跡群は旧石器時代から人々が生活していたことがわかっています。弥生時代においては「奴国」の王墓や青銅器・ガラスの工房がある須玖遺跡群と、拠点集落である那珂・比恵遺跡群の中間に位置する集落として重要な位置を占めています。また、奈良時代には多くの瓦の出土から寺院の存在が予想されています。

今回の調査では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての堅穴住居が密集して発見され、弥生土器や土師器など貴重な文化財が出ました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました白水敬子様をはじめとする関係各位の皆様には、心より感謝申し上げます。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 憲一郎

例　　言

1. 本書は、福岡市南区井尻4丁目170-1、171-1、172-16、172-17の共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が1999(平成11)年3月15日から4月16日にかけて発掘調査を実施した井尻(いじり)B遺跡群第12次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、堅穴住居→SC、ピット→SPとした。遺構番号は種類別に付けた。
3. 本書に使用した遺構実測図は伊藤健太、今塩屋毅行、田上勇一郎が作成した。遺物実測図は土器を武下里織、鉄器を西山めぐみ、石器を吉留秀敏が作成した。また、製図には吉留、武下、西山、丸井節子、山本良子、加集和子、田上があつた。
4. 本書に使用した写真は田上が撮影した。なお、鉄器のX線写真は福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏、片多雅樹氏にお願いした。
5. 本書に使用した標高は海拔高である。
6. 本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し6°18'西偏する。
7. 本書の旧石器時代の遺物について吉留秀敏が、その他の執筆・編集は田上が行なった。
8. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

目　　次

I はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 調査地点の立地と環境	3
II 調査の記録	4
1. 調査の経過と概要	4
2. 発見された遺構と遺物	6
(1) 堅穴住居	6
(2) ピット	18
(3) 旧石器時代の遺物	19
IIIまとめ	20

I はじめに

1. 調査にいたる経緯

1998(平成10)年12月22日付で、株式会社タイヘイ代表取締役伊藤俊樹氏から福岡市南区井尻4丁目170-1、171-1、172-16、172-17における集合住宅建設に伴う埋蔵文化財の開発事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である井尻B遺跡の範囲内であり、申請地内ですでに1995(平成7)年に第6次調査を行い、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての堅穴住居や奈良時代の掘立柱建物が検出され、鏡や銅鏡の鋳型が出上していることから、6次調査で発掘区外であった125m²について発掘調査が必要である旨を回答した。

発掘調査は土地所有者の白水敬子氏との委託契約により1999(平成11)年3月15日より4月16日まで実施した。また、整理作業と報告書の刊行は1999年度に行った。

2. 調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託	白水敬子	町田英俊(平成10年度)
調査主体	福岡市教育委員会 教育長	西憲一郎(平成11年度)
調査統括	埋蔵文化財課 課長	柳田純孝(平成10年度)
		山崎純男(平成11年度)
調査第2係長	山口廣治(平成10年度)	力武卓治(平成11年度)
調査庶務	文化財整備課	河野淳美
調査担当	埋蔵文化財課調査第2係	出上勇一郎(本調査)
調査作業	朝倉浩司 池田省三 伊藤健太 今塩屋毅行 岩本三重子 大賀規矩雄 岡部静江 小川秀雄 木原保生 高崎秀巳 豊永裕保 中村フミ子 西山径子 布江孝子 野田淳一 濱口康一郎 播磨千恵子 藤野トシ子 吉住政光	
整理補助	武下里織 西山めぐみ	
整理作業	木村良子 丸井節子 山本良子 尾崎君枝 加集和子	

発掘調査に至るまでの条件整備や調査中の調整等に関して、白水氏をはじめとして、株式会社タイヘイ、株式会社福住には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し、無事終了することができた。また、整理作業において吉留秀敏、久住猛雄(福岡市教育委員会)の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

調査番号	9865		遺跡略号	IZB-12	
調査地地籍	南区井尻4丁目170-1、171-1、172-16、172-17			布地図番号	井尻 25
開発面積	1,102.78m ²	調査対象面積	125m ²	調査面積	125m ²
調査期間	1999年(平成11年) 3月15日～4月16日				



- 1 井尻B遺跡
- 2 鶴居遺跡
- 3 東那珂遺跡
- 4 比恵遺跡
- 5 那珂遺跡
- 6 五十川遺跡
- 7 那珂君休遺跡
- 8 板付遺跡
- 9 高烟遺跡
- 10 諸岡A遺跡
- 11 諸岡B遺跡
- 12 笹原遺跡
- 13 三筑遺跡
- 14 南八幡遺跡
- 15 井尻A遺跡
- 16 寺島遺跡
- 17 横手遺跡
- 18 大橋E遺跡
- 19 三宅C遺跡
- 20 三宅B遺跡
- 21 野多目C遺跡
- 22 曰佐遺跡
- 23 弥永原遺跡
- 24 曰佐原遺跡
- 25 須玖遺跡群
- 26 岡本遺跡群

Fig. 1 井尻B遺跡群の位置(1/25,000)

3. 調査地点の立地と環境

井尻B遺跡群は福岡平野を北流する那珂川、御笠川に挟まれた洪積台地上に位置する。この台地は阿蘇山の火碎流の堆積物からなり、堆積物上部の暗赤褐色土を鳥栖ローム層、下部の乳白色土粘土層を八女粘土と呼んでいる。火碎流堆積物は春日丘陵から北方に井尻、五十川、麦野、板付、諸岡、那珂、比恵と断続的に分布しており、それぞれに遺跡分布がみられる (Fig. 1)。

井尻B遺跡群においてはこれまで15次にわたる調査が行われており、旧石器時代、弥生時代中期から古墳時代前期、奈良時代といった時期に濃密な生活痕跡が残されていることがわかっている。

今回の調査地点は井尻B遺跡群の南部に位置し、現標高は14.9mである。周辺ではこれまで2次、5次、6次と調査されている (Fig. 2)。以下、時代を追って簡単に説明する。

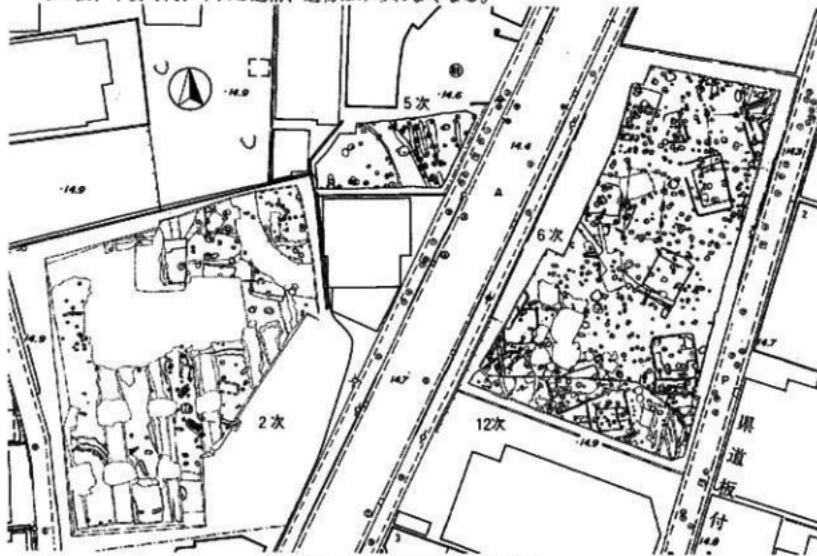
最古の遺物としては2次調査地点で発見されたナイフ形石器がある。遺構としては細石器文化期の遺物集中部が発見され、福岡市内では数少ない旧石器時代の遺跡として注目されている。

弥生時代後期から古墳時代前期は井尻B遺跡群の集落の最盛期である。2・6次調査地点において堅穴住居群が検出されている。2次調査地点の西側では住居址群とは画された墓地が広がる。6次調査地点では該期の土坑から銅鏡・銅鏡の鋳型が出土している。

古墳時代においては、2・5次調査地点にまたがって古墳の周溝が検出され、円筒埴輪や朝顔形埴輪、家形埴輪が出土している。5世紀後半の円墳もしくは前方後円墳と考えられ、井尻B1号墳と名付けられている。

奈良時代の集落も営まれており、2次調査地点で堅穴住居、6次調査地点で掘立柱建物が検出されている。

その後、平安時代、中世と遺構、遺物はみられなくなる。



II 調査の記録

1. 調査の経過と概要

調査は3月15日、バックホーによる表土除去から開始した。調査前までは駐車場として使用されており、30~40cmパラスによる盛土がある。その下は灰褐色の砂質土があり、これを取り除くとロームの暗赤褐色土が現れる。標高は14.4~14.5mである。この面で広げると暗褐色土の遺構が検出できる。



Ph. 1 調査区全景(西から)



Fig. 3 造林分布图 (1/100)

調査面積は125m²と狭かったが、竪穴住居8軒、ピット多数が検出できた。竪穴住居は方形を呈し、時期は弥生時代後期から古墳時代初頭である。コンテナケース7箱分の遺物が出土した。4月15・16日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査地点は6次調査と接しているため、6次調査の遺構の延長が検出されている。12次調査のSC01、SC02、SC05、SC06、SC07はそれぞれ遺構28、住居跡27、住居跡24、住居跡22、住居跡23にあたる。なお、6次調査の溝31の延長部分も検出されたが、近年の遺物が出土しており、擾乱とした。

2. 発見された遺構と遺物

(1) 竪穴住居

SC01・08 (Fig. 4・Ph. 2)

調査区東端で検出された竪穴住居で、半分以上は調査区外である。当初1軒の住居と考えていたが、掘り下げていくうちに2軒の重複であることが判明し、北側をSC01、南側をSC08とした。覆土は暗褐色土でローム粒、焼土粒を含む。切り合いがはっきりせず、前後関係は不明である。

SC01は6次調査の遺構28にあたる。方形住居で、規模は、南側の壁がSC08との重複で確認できなかったが、柱穴の位置から推定すると南北2.7mと考えられる。東西は1.8mまで調査している。残存壁高は10cmである。主柱穴は4本であると考えられ、そのうち西側の2本(SP48・SP49)が調査区に入った。床面からの深さは40cmと30cm、柱間の距離は1.9mである。調査区外の東側は不明であるが、それ以外の3方向はベッド状遺構がある。床からベッド状遺構までの高さは5cm程度である。

SC08は調査区南東隅で住居の北西角を検出した方形住居である。前述のようにSC01と重複しているが、SC01より掘り込みが深いため北側壁の位置が確認できた。調査区内で東西0.9m、南北1.5m確認した。北壁際の床が10cm窪む。残存壁高15cmである。柱穴は発掘区内では確認できなかった。

出土遺物は少なく図化に耐えるものはなかった。

形態よりSC01は古墳時代前期の住居と考えられる。

SC02 (Fig. 5・Ph. 3)

調査区東側で方形竪穴住居の南東コーナー部を検出した。残存壁高は5cmと非常に残りが悪く、南西コーナーは確認できなかった。6次調査の住居跡27にあたり、主柱穴2本の南北方向に長軸をとる長方形竪穴住居になる。6次調査の住居跡25・26に切られる。住居の規模は東西約4mで、南北は北側壁が6次調査で確認されていないが、柱穴の位置から5.2もしくは5.0mと推定できる。今回調査した部分では東壁に壁溝が確認された。

少量の土器が出土したのみである。

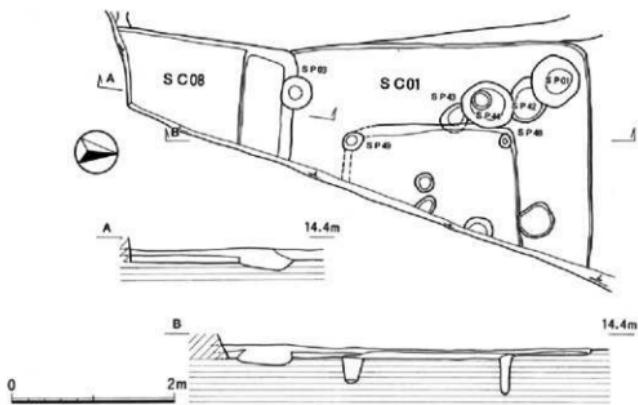
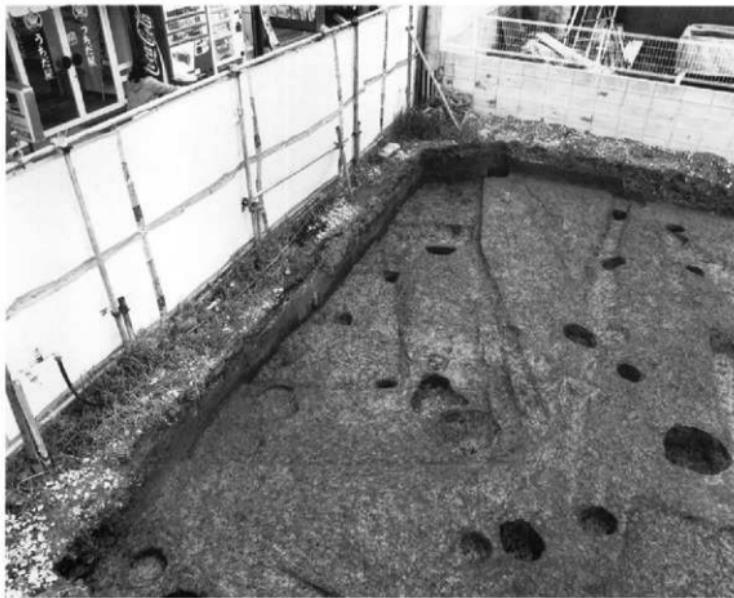


Fig. 4 SC01・08 実測図(1/60)



Ph. 2 SC01・08 (北から)

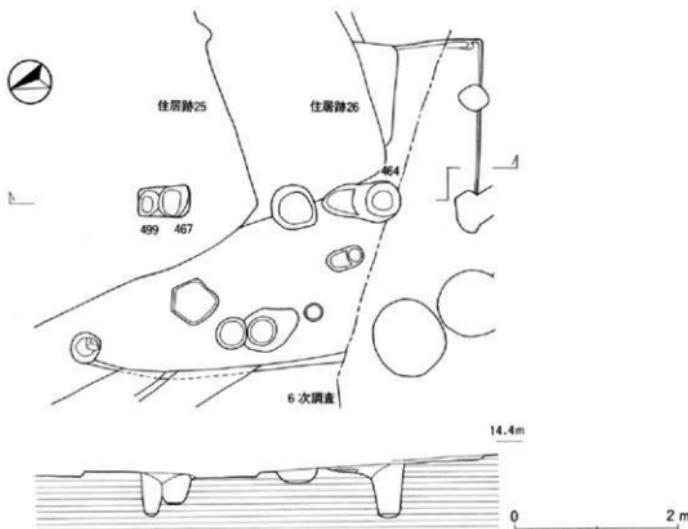
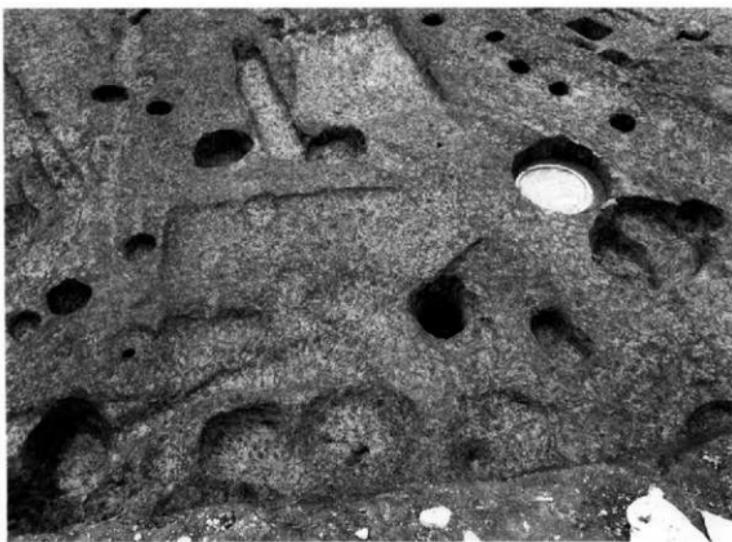


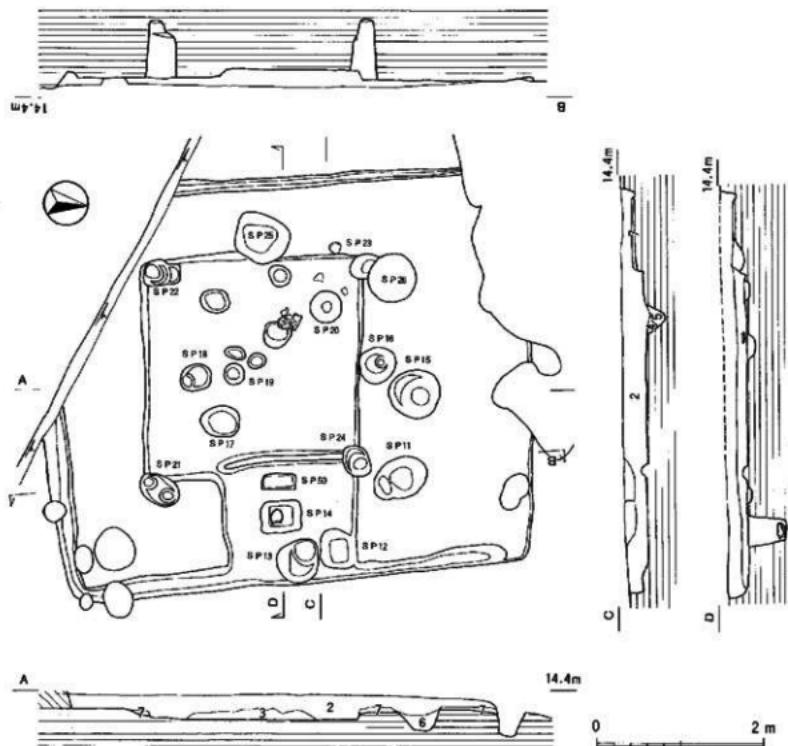
Fig. 5 SC02 実測図(1/60)



Ph. 3 SC02 (北から)

S C 0 3 (Fig. 6 · 7 · Ph. 4 ~ 6)

調査区中央やや東寄りで検出した東西4.9m、南北5.9mの方形堅穴住居である。南西コーナーは発掘区外に伸び、北側の壁は擾乱により一部立ち上がりが確認できなかった。遺存状況の悪かった北側以外は壁溝が巡る。S C 0 5 を切る。残存壁高は30cmである。東辺中央部以外に高さ10cm程度のベッド状遺構が付く。北側のベッド状遺構は幅2.0mで他より幅広である。他辺の幅は0.7~1.0m。北側と西側のベッド状遺構は薄い盛り土がなされるがそれ以外は地山削りだしである。東辺中央部はベッド状遺構がなく床面の高さと同じになり、床との境にかまほこ状の仕切りが地山削りだしで設けられる。入り口部分と考えられる。この部分には壁際に深さ65cmの円形のピット (SP 13) があり、北



- 1: 塗茶褐色土 灰化物粒、焼土粒、ローム粒含む。
ロームブロック多く含む。
- 2: 塗茶褐色土 灰化物粒、焼土粒、ローム粒、ロー
ムブロック含む。
- 3: 塗茶褐色土 灰化物粒、焼土粒、ローム粒含む。
ロームブロック多く含む。

- 4: 塗茶褐色土 灰化物粒、焼土粒、ローム粒含む。灰化物、ロー
ムブロック多く含む。しまりなし。
- 5: ロームに塗茶褐色土が亂じる。
- 6: 暗褐色土 灰化物粒、ローム粒・ロームブロック
含む。
- 7: ロームに暗褐色土が混じる。

Fig. 6 S C 0 3 実測図(1/60)

側には深さ40cmの方形ピット（S P 1 2）が設けられる。中央部には深さ45cmの方形ピット（S P 1 4）があり、古式土師器の壺が出土した。その西側に長方形の深さ10cmの浅いピット（S P 5 0）がある。入り口に関する施設であろうか。床部は2.5m四方の略正方形で、北側は入り口部の北側のラインと描えているが、南側は入り口部ラインより1m程南に広がる。柱穴は床の四隅に設けられている（S P 2 1～2 4）。柱間はほぼ2.5mである。径15～20cmの柱痕がみられた。

古式土師器と弥生土器、鉄器が出土している。1～3は壺である。1は歪んでいるので片側推定線で記した。復元口径11.3cm、推定胴部最大径18.7cm、器高21.3cm。胴部外面調整はタタキのち斜め方向のハケ。2、3はS P 1 4より出土。外面の調整はタタキ。復元口径は14.4cmと14.0cm。4は小型の鉢で復元口径11.0cm。5は高壺である。6は脚付き鉢の脚部である。脚部の径は6.7cm。かなり歪んでいる。7は鉄鎌である。小型の直刃鎌で、刃部と基部が明瞭に区分できるタイプ。8は鉈である。両側に刃を付け、やや反りを持つ。反りの内側には三叉鎬を付ける。

出土遺物からS C 0 3は古墳時代前期の住居と考えられる。



Ph. 4 S C 0 3 (北から)



Ph. 5 S C 0 3 遺物出土状況(南から)

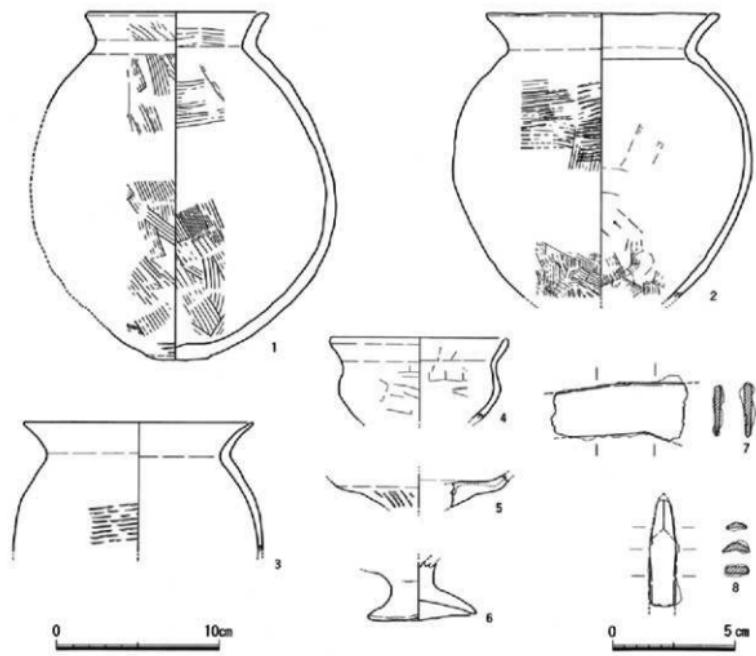
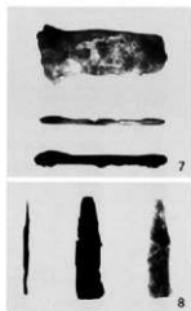


Fig. 7 SC 03出土遺物実測図 (7・8:1/2・その他:1/3)



Ph. 6 SC 03出土遺物(約1/4)



Ph. 7 SC 03出土器物X線透過写真(約1/2)

SC 04 (Fig. 8・9・Ph. 8)

調査区中央南側で検出した遺構である。SC 03 に切られている。大半は調査区外であり、全容は不明で堅穴住居ではないかもしれないが、壁が直線的で、底が平坦であるので、住居として報告する。残存壁高は10cm。壁溝は確認されなかった。

出土遺物は少ない。9は弥生土器の壺の底部である。磨滅が著しく、調整不明。

SC 05 (Fig. 10・11・Ph. 9)

調査区中央で確認された方形堅穴住居である。6次調査の住居跡24にあたり、今回は南側部分を調査した。南東部分はSC 03 に切られる。東西方向に長軸をとり、規模は東西7.2m、南北4.8mである。残存壁高は30cm。四辺に壁溝が巡る。幅1mのベッド状遺構が南辺以外にあり、床からの高さは20cmである。6次調査で調査した北側のベッド状遺構は盛り土であったが、そのほかは地山削りだしである。主柱穴は2ヶ所 (SP 35と6次調査のピット404) で、床の東西辺のベッド間にあるが、SP 35はベッドから若干離れている。柱間は4.0m、床からの深さは60cmである。ベッド状遺構のない南壁の中央には直径60cm、深さ40cmの壁際土坑 (SP 30) がある。貼床は確認されなかった。

弥生土器が出土した。10~13は壺である。10はやや直立気味のくの字状口縁で、復元口径13.7cm。外面の調整はタカキのちハケ。11は胴部片で突蒂が付く。12・13は底部である。14は短頸壺。15は壺の底部である。16~18は高环の脚部である。19~21は器台である。

出土土器から弥生時代終末の堅穴住居と考えられる。

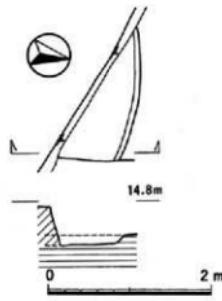


Fig. 8 SC 04 実測図(1/60)

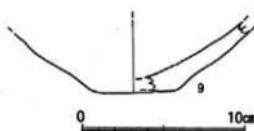


Fig. 9 SC 04 出土遺物実測図(1/3)



Ph. 8 SC 04 (南から)

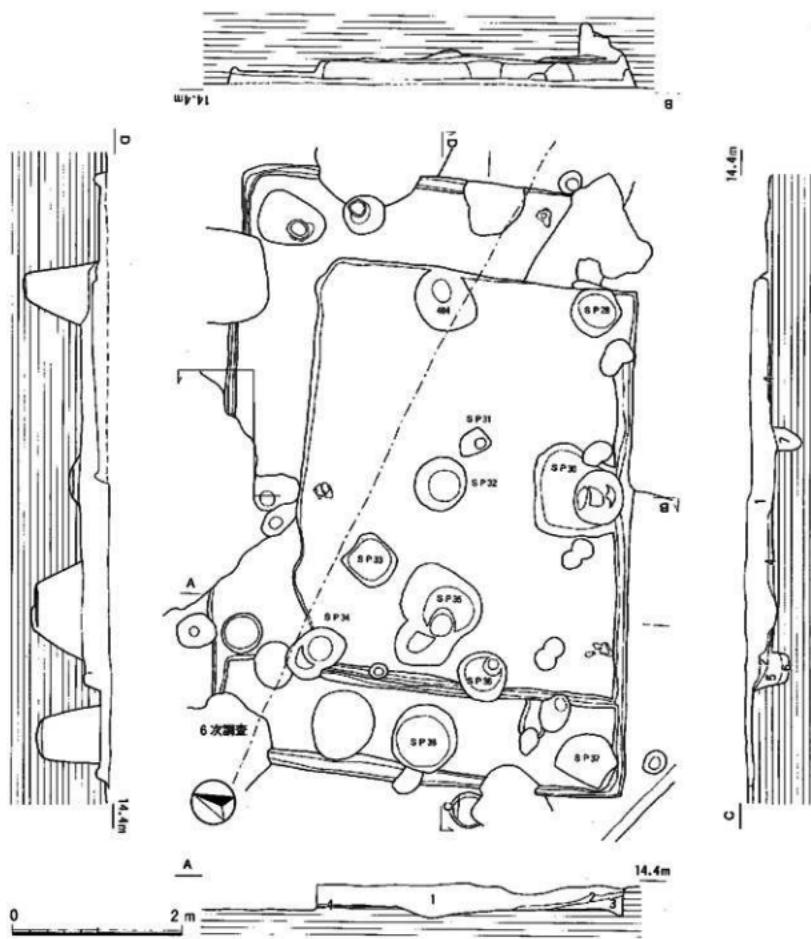


Fig. 10 SC 05 実測図(1/60)



Ph. 9 SC 05 (東から)

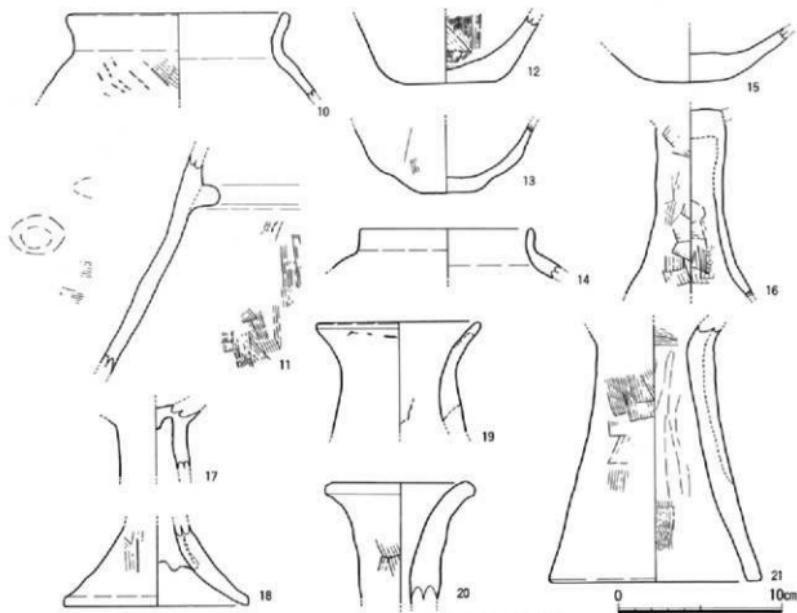


Fig.11 SC 05 出土遺物実測図(1/3)

S C 0 6 (Fig.12・13・Ph.10・11・13)

調査区西側で検出した方形堅穴住居で、6次調査の住居跡22にあたる。南側部分を調査したが、擾乱がひどく、遺存状態は悪い。S C 0 5 の西壁そばで擾乱に切られた三角形の落ち込みがあり、掘り下げるとき溝が巡った。これがS C 0 6 の南東コーナー部であり、溝が壁溝であると判断され、住居の平面規模が判明した。長軸はやや西に振れた南北方向にとり、南北5.2m、東西3.8mを測る。北側は6次調査で幅1m程のベッド状遺構が付くことがわかっているが、南側は擾乱を受け、残存状況が悪い。S P 5 1 の南側に擾乱の底で若干の立ち上がりがみられるが、発掘区南の際で、コーナー部分を確認している部分がベッド状遺構の立ち上がりであろう。北側と同じく幅は1m程になる。主柱穴は2ヶ所(S P 5 1と6次調査のピット483)で床の南北辺のベッド際にある。柱間は3.0mで、床面からの深さは40cmである。床中央付近に若干窪み、ロームが赤化した部分がある(S P 5 2)。炉であろう。

住居の遺存状態は悪かったが、比較的遺物量が多い。22・23は甕である。22は口径26.3cm、23は復元口径18.4cm。24は複合口縁の壺の口縁部。屈曲部の上部は直立する。復元口径21.0cm。25は高坏である。26は受部が袋状を呈する器台である。器高19.0cm。

出土土器から弥生時代後期後半から終末の住居と考えられる。

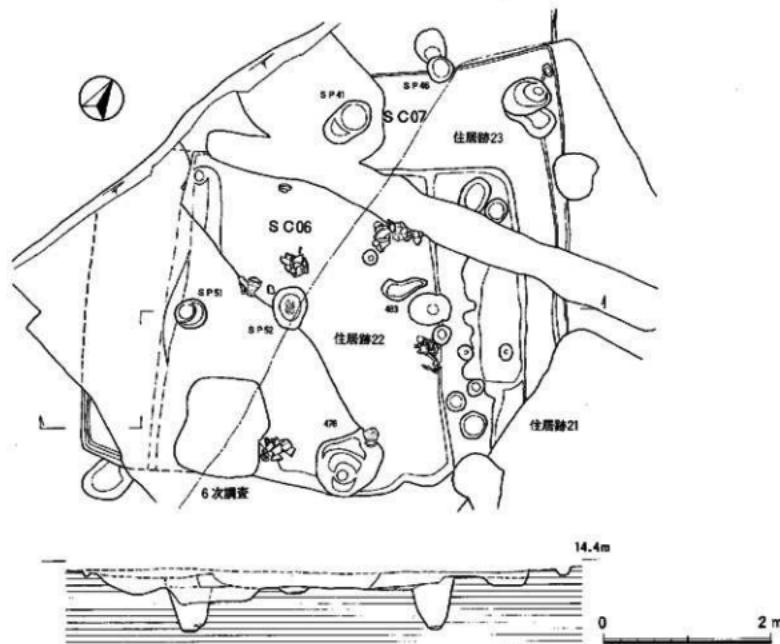


Fig.12 S C 0 6 - 0 7 実測図(1/60)

S C 0 7 (Fig.12・13・Ph.12)

調査区西側で検出した方形竪穴住居で、6次調査の住居跡23にあたる。6次調査の結果からこの部分に住居があることは予想していたが、ロームが若干汚れている程度で明瞭なプランをとらえられなかった。貼床部分であったのであろう。10cm程度の厚さであった。西壁の一部を検出したのみである。S C 0 6 に切られる。残存部が少なく規模は不明である。

出土遺物は少ない。27は甕の胴部である。斜めに刻みを入れた突帯を貼り付ける。



Ph.10 S C 0 6 (北から)



Ph.11 S C 0 6 遺物出土状況(東から)



Ph.12 S C 0 7 (北から)

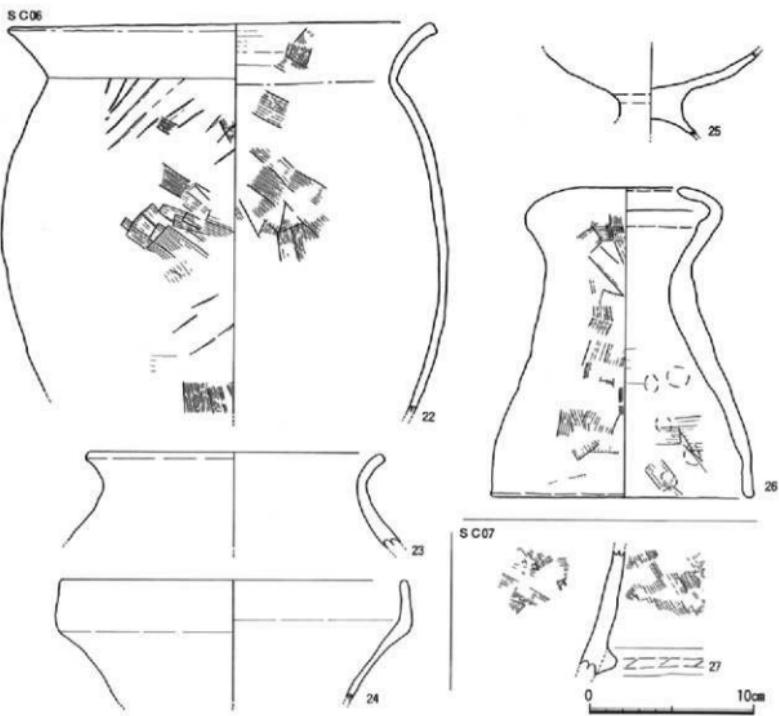


Fig.13 SC 06・07出土遺物実測図(1/4)



Ph.13 SC 06出土遺物(約1/4)

(2) ピット

ピットは多数検出したが、建物としてまとめることはできなかった。また、竪穴住居内より検出されたピットも住居に伴わないものが多數ある。

ピット出土の土器をFig.14に示す。28はSP 2 6出土の弥生土器の器台である。受部の復元径は19cmで復元したが、小破片のため不正確。29はSP 2 6出土の弥生土器の壺の底部である。30は弥生土器の壺である。口縁はく字状に折れ曲がる。復元口径15.2cm。SP 3 1出土である。31はSP 3 2出土の弥生土器の壺の底部である。ややレンズ状を呈する。32は須恵器の壺の胴部下半から底部にかけての破片である。内面に青海波紋、外面に格子目のタタキの痕跡。SP 3 7出土。

ほとんどのピットは竪穴住居と同じ弥生時代か後期から古墳時代前期にかけてのものと思われるが、SP 2 6、3 7、4 6では須恵器の破片が出土している。

(3) 旧石器時代の資料

本調査区では1点の旧石器時代資料が出上した。なお、隣接する6次調査で旧石器時代資料が3点出土しており、関連する資料を含んでいる。未報告であるのでここで併せて報告する。石器類の内容は本調査が石核1点、6次調査が台形石器1点、剥片1点、細石刃核1点の計4点である。

33は石核である。住居跡SC 0 3覆土から出土した。石材は漆黒色の黒曜石である。表面は円錐面をもち肉眼的には牟田産出黒曜石に類似する。寸詰まりの縱長剥片か不定形剥片の剥片石核の残核とみられる。周囲の剥離が進んでいるために明確ではないが、形状から円錐を分割し、分割面を上面にして剥離作業を進めていると見られる。まず、分割面(d面)から全周(a~c面)に縫面の除去をかねた石核調整の剥片剥離がおこなわれている。次にこの剥離された側面から分割面に向かって剥片剥離がおこなわれている。残されている剥離面で見ると剥離作業はb面→c面→a面から順に、いわば右回りに進められている。最終の剥離はa面からおこなわれたものであり、短い段階状剥離に終わっている。この石核の特徴は「原の辻型」台形石器作成の第一工程にともなうものと考えられる。

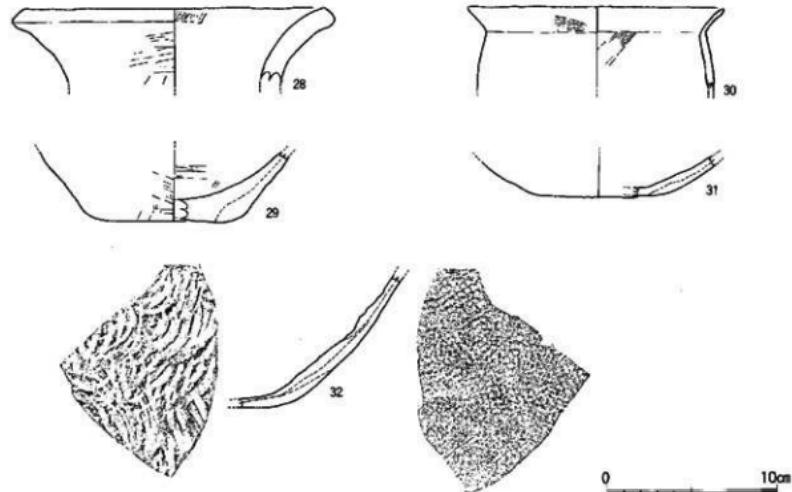


Fig.14 ピットの出土遺物実測図(1/3)

34は細石刃核である。石材は漆黒色の黒曜石である。残された自然面から円礫であったとみられる。打面部ならびに右側辺下部に新しい剥離（キズ）がある。打面部および右側辺部に分割面があり、いずれもポジティブ面である。この分割面は自然面から直接打撃されており、剥離面の観察によると右側面が新しい剥離と判断できる。ただし、両剥離の打撃部は近接しており、あるいは同時に剥離によつて分割した可能性も残る。石核調整は打面から両側辺におこなわれている。底辺部に調整があるかはキズのために明確でないが、少なくとも左側辺底部には調整が認められない。細石刃剥離は短辺を作業面としている。作業面は平坦ではなく、中央がやや尖るように形成されている。この細石刃核の形状は「船野型」細石刃核に類似している。35は台形石器である。石材は弱透明黒色の黒曜石である。おもに刃縁部に新しい剥離（キズ）があり、形状を損なっている。不定形剥片の両側辺にプランティングを施している。基部面は円礫状の自然面が残る。右側辺の調整は背面側から、左側辺は腹面側からプランティングを施す。背面には右側面からの平坦剥離が一面みられる。石器の形態は明確でないが、素材剥片の形態や二次調整の技法から「原の辻型」台形石器と判断できる。長さ2.4cm、幅2.0cm、厚さ0.8cmを測る。36は微細剥離がある横長の不定形剥片である。石材は漆黒色の黒曜石である。剥片の左側辺に微細な剥離がみられる。剥片は背面にネガティブな分割面をもち、後続打面から剥離されている。背面には先行する剥離が1面あり、これも稜状打面から剥離されている。本剥片の刃縁部は階段状剥離のために丸くなっている。長さ3.2cm、幅1.8cm、厚さ1.0cmを測る。

報告した資料は二つの時期に分かれる。まず「原の辻型」台形石器に関わるもので、33の石核、35の製品、36の剥片であり、共通の石器群と見られる。これは後期旧石器時代後半に位置づけられる。次に細石刃核であり、北側の2次調査の細石刃石器群との関連が問題となるが、後期旧石器時代終末から縄文時代草創期に比定される。

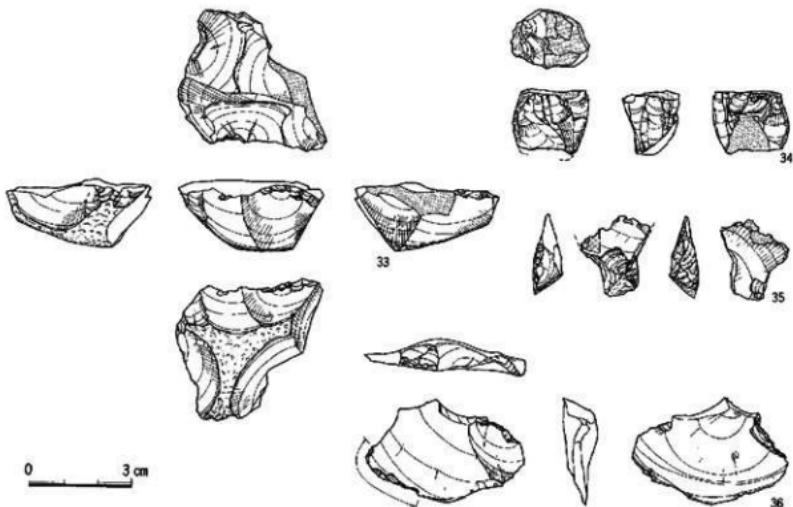


Fig.15 旧石器時代の遺物実測図(2/3)

III まとめ

今回の調査では調査面積125m²と狭かったにもかかわらず、竪穴住居が8軒検出された。隣の6次調査の成果からある程度の住居の検出は予想できたが、それを上回る濃密な分布状況であった。

今回検出した住居は、出土遺物が少なく、時期を確定できないものもあったが、ほぼ弥生時代後半から古墳時代前期の幅に収まるものであろう。井尻B遺跡ではこの時期より集落が拡大し、台地上での調査ではほとんどの調査区で竪穴住居が検出される。特に3次調査では17軒の竪穴住居が密集して検出されている。今回の12次調査での竪穴住居の密度もかなり濃いといえる。

今回の調査区は非常に狭いが、周辺の2、5、6次調査区と併せて考えると集落構造の一端が見えてくるようになってきた(Fig.2)。住居が密集しているのは12次調査地点である。北側の6次調査地点にいくとやや分布が散漫になる。また時期も若干新しくなる。東側の2次調査地点でも住居の分布はやや散漫であるが、石蓋土壙墓、土壙墓が調査区の南部に分布する。この部分は住居もなく、墓地としての土地利用が明確になっていたようである。今後周辺の調査例が増えるにしたがい、徐々に集落構造が明らかになっていくのを期待したい。

今回は出土しなかったが、隣の6次調査区では青銅器の鋳型が2点出土している。そのほかの調査区でも出土例が出始め、井尻B遺跡内で青銅器の製作を行っていたのは確実となってきた。井尻B遺跡の南方1kmの須玖・岡本遺跡群では九州の弥生時代における青銅器の鋳型の半数が出土している。井尻B遺跡での青銅器生産が、これらの一帯に含まれるのか、それとも井尻B遺跡内で独立した生産体制を持っていたのか、今後の検討課題である。

また、今回の調査では旧石器時代の資料である原の辻型台形石器作成にともなうと考えられる石核が出土している。隣の6次調査で出土した原の辻型台形石器と剥片をあわせると、井尻B遺跡で石器製作を行っていたということを示すものであり、石器製作技術の広がりを考える上で貴重な資料となった。

井尻B遺跡はまだ調査例が少なく、調査面積もわずかである。しかし、現在、遺跡内で新設道路の建設が進められており、今後周辺の開発が激しくなると予想される。それに伴う事前の埋蔵文化財調査により井尻B遺跡における集落の様相が次第に明らかにされていくであろう。

井尻B遺跡 8

-井尻B遺跡群第12次調査の報告-
福岡市埋蔵文化財調査報告書第645集

2000年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
☎092-711-4667

印 刷 有限会社筑紫印刷
福岡市東区社領3丁目8-7
☎092-624-7331

IJIRI B SITE 8

- Results of the 12th excavation of Ijiri B sites -
Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city Vol.645



2000

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY